

地域コミュニティの 防災力

連載 第37回

津波被害軽減と消防団の活動



常葉大学大学院 環境防災研究科 教授
重川 希志依

1. はじめに

東日本大震災時において254名（うち公務中198名）の犠牲者を出した消防団は、住民の生命・財産を守るため多様な活動を担ってきました。当時の消防団活動状況を記録した報告書等は多数刊行されていますが、これらの報告書には一人一人の団員が各々の立場で震災を乗り越えてきた知恵や工夫、あるいは悩みや葛藤など、個人の思いはほとんど記録されていません。一人一人の団員が抱える葛藤や、苦境を乗り越えるために現場で役立った知恵や工夫など、公表されている報告書等では知ることのできなかつた現場での生の声を広く共有化することを目的として、震災後多くの消防団員の方たちからお話を伺ってきました。特に、地震・津波・火災の複合被害を受けた地域の消防団は、常備消防に勝るとも劣らない活動をしていたことが明らかとなりました。

2. 救助と消火活動

消防の常備化が進んだ現在、消防団は平常時には常備消防の補完的な役割を果たす場合が多いと考えられます。しかし東日本大震災のように極めて大規模な災害が起こった時には、常備消防の手が全く回らない火災現場の消火活動を、消防団単独で成功させていた例が多数ありました。

□団員だけで大火を防いだ

消防署の方から「火を消してくれ」というお願いが無線に入ったわけなんです。釜石消防署のポンプ車・救急車は殆ど壊滅状態で流されたわけ。火消すっていうのはうち（消防団）のポンプ車一台しか動かせなかったんで「ホースは消防署員が火点まで担いで持っていくからなんとか火を消してくれ」ってお願いされたもんだから。「じゃあ、まずやるだけやりましょう」っていうことで、防火水槽までポンプ車を持って行ってそこからあるだけのホースを延長し

地域コミュニティの 防災力 重川 希志依

て。避難してる公園の方角にある三階建ての建物が燃えてるって。「まずその火消さない」とっていうことで殆ど一昼夜、朝方までかかってその火を鎮火させたんです。消防団で水をあげて火を消したっていうのは第1分団3部の一台だけのポンプでこの町の火を消したんです。たった4・5名で火を消した。それが無ければ私たちの町も大火。間違いなく。

3. 避難誘導

津波からの避難誘導や逃げ遅れた方の救助は、自らの生命の安全と目前にいる住民の生命を咄嗟の判断で選択しなければならない状況下で、多くの住民の命を守っていました。

□きれいな言葉で言っても避難しない

そこで私ふと思ったのは「避難して下さい」とっていう綺麗な言葉で言っても避難しないんだよね。「あっ」と自分はそう思って「逃げろー、大津波来る。津波来たぞ」とってというような大きな声を出したら「あっ、やっぱりこれは大変なことなんだな」とって思った人は走って逃げるんです。半纏を着た人間が「逃げろ」とって走って逃げれば「皆も消防団員が逃げた」と大変なことだとして逃げるのかなあと思ったり。

家の前で立ったまま動かないおばあちゃんがいた。足腰悪いおばあちゃん「これ、駄目だ。とにかくポンプ車に乗せて高台に行かなきゃ大変なことになる」とってことで、最後におばあちゃんをポンプ車に乗せてお寺さんに上がった。われわれが消防団として与えられた仕事はやっぱりやんなきゃないってことで。副部長が「いや、部長もう限界だ。われわれも逃げましょう」と。それでも一人でも二人でも助けなきゃないっ

ていう気持ちは私にはあったんだけどどうしても副部長がもう判断で「もう限界だ。ここであがんなきゃわれわれも死んでしまう」とっていうことで、まず「じゃあ、そうするべ」とっていうことであがって間もなく津波来た。

4. 避難所の運営

避難所となった場所で逃げ込んだ住民への的確な呼びかけ、周辺地域への協力依頼、対外交渉など、消防団の本務ではない様々な対応をし、津波から生き残った住民の生活を守り抜いていました。

□歯を食いしばって何とかしなきゃ

全員を避難所に収容できなかった。それで、親戚や知人友人、とにかくよそに行ってお世話になれる人はそっちに行ってお世話になろうと。ほんで部屋を二つに、男女に分けて入りましょうと。あとは電気がなかったんで、ろうそくをなんかどっさりもらったような、それから灯油だとか、でもちょっと動けば胸が苦しくなる、それを我慢しながらやりましたね。

とにかく皆さんに声掛けしてまず毛布・反射板のストーブ。「なんとか助けて下さい。ある方はとにかく家に戻って持って来てもらえねえべか」とってようなお願いをして快く持ってくる人たちが結構いた。まず暖を取るようになって声掛けしてたんです。毎日朝は消防団員からはじめ仙寿院に避難した有志一同、リヤカーの小さいやつを拾ってきてそれに瓦礫を積んで仙寿院まで持って来て毎日ドラム缶に入れて火を焚いた。「自衛隊が来るまで何日だ？二日で来れるのか？三日で来れるのか？」ってそれまでは何とか歯喰いしばって食料・水

関連を何とかしなきゃねえなっていうことで皆で色々知恵を出し合ったり。

5. 「自分の命」「助けるべき人の命」

「家族の存在」の間で

□消防団も生き残らないと

正義感と命は背中合わせです。だから正義感を持てる人程命を落としやすいです。普通の人がこういう半纏着てるわけです。スーパーマンがマント着てるわけじゃないんです。だからそれを考えるとそうやって消防団も生き残らないと今度守る人がいなくなってしまうので、やっぱり「命あって初めて人を守れる」という。だから震災後は「とにかく最短な活動をして逃げろ。生き延びろ。自分の命を守れ」とそういうことを団員には皆話をしてる。消防活動をおろそかにしろっていうことじゃなくて自分が生き延びてそれから地域を守れ。生き延びねば誰も守る人がいなくなってしまう。消防団壊滅してしまうと誰がポンプを動かし火災を消す？だからそういう考え方でいこうと。

私も家も流されたので、この40数年消防団やってるんだけど初めてだね。家族で泣かれたのは。「何でそこまでお父さんやんなきゃないの？もうたくさんだ。辞めてくれ。お父さんは家族ぶん投げて人のためにやってるでしょ。私たち残された家族はどうなるの？」とそう言われたときは「は～、なるほどなあ」って。初めてだね。家族で泣かれて袖引っ張られたの。だから「あ～、もう辞めるべきなのかな」。

消防・防災の専門的な知識を有し通常から訓練を積む消防団ですが、避難所となった場所に逃げ込んだ住民への的確な呼びかけ、周辺地域への協力依頼、対外交渉など消防の知識のみならず、人間力が非常に高い人材が多く存在していることが改めて浮き彫りになりました。東日本大震災時に地域コミュニティの防災力を発揮することができたのも、消防団員の消防・防災のリーダーとしての役割以上に、多様な場面で地域住民を率先する力を発揮していたことが大きな要因であったことが分かりました。